

巻頭言

2008.10月号
茗溪塾

茗溪塾教務部 03-3659-8638

「努力」の理由 ...強力伝...

茗溪塾塾長 宇野 雅春

受験生ならば「過去問」の季節です。自分の受験する学校の過去の入試問題を解いてレベルを上げていく時期ということです。あちこちで自主的に取り組む姿が見受けられます。少し前のことですが、生徒と一緒に「過去問」を解いていたとき、国語の問題の中に、妙に引きつけられる文章がありました。「強力伝」という小説の抜粋で、白馬という日本アルプスの名峰に住んでいる強力「鹿野」と富士の強力「小宮」がはじめて出会うシーンです。白馬山の山頂に大きな花崗岩で出来た風景指示盤を作るため、その材料となる巨岩を運ぶために訪れた小宮を、鹿野が出迎えるくんだりなのですが、同業者ゆえの探り合いや微妙な心の動きが細かく描写されていて面白く、国語は専門外なので解くつもりもないままついつい読み込んでしまいました。

「..... 駄目だろう、鹿野はそう考えると、軽い気持ちにもなるが、すぐその後で、足柄の山奥からわざわざ来てくれた小宮をこのままで帰すのは可哀想な気がした。」

よく山に登ると、誰がどうやって運んだのだろうかと思う巨岩があつたりしますが、そんなことも思い出しながら、この物語の顛末を知るために最後まで読んでみたいと思いました。それから書店に行くたびに、文庫コーナーを隈無く探しましたが、なかなかこの「強力伝」(新田次郎著)を見つけられませんでした。

最近になって、都心の大きな書店に行く機会があり、やっと手にとって読むことが出来ました。その内容は、私の想像を遙かに超えたものでした。

この小説の中に語りべとして登場してくる石田の言葉を借りれば、「いかなる人間でもこの石を背負って歩けるはずがない」その大きな石を小宮は運び上げる決心をします。あたかもそれが自分の宿命のようにきっぱりと決断するのです。特別製の「背負子」や、軽いのに深く食い込んで滑らない大町アイゼンという道具を鹿野が提供したということも小宮を動かした理由の1つにはなっていたように思います。

出発前夜石田は必死で小宮を説得します。「小宮は深く首をたれて一言も言わなかった。...中略...彼の顔には明らかに反省の兆候を示す色が動いたようだ。やがて両手を膝に置いてじっと聞いている彼の目に何か光る物が、...中略...石田はいささか薬が効きすぎたと思った。」しかし石田が朝目覚めたとき、小宮の姿はそこにはありませんでした。「石の置き場所に来てみると、2つのうち1つがない。近寄って調べてみると小宮が力一杯ふんばった地下足袋の生々しい跡が一寸程も黒土にのめりこんでいた。」

小学校5年生の娘のために、高山植物を採集したりもする心優しい小宮という人物が、なぜ死をも覚悟せざるを得ないような巨岩運びをするのか? 「一步一步の歩みが生と死の境界を行く」その山行きの後半の展開には、思わず息を呑みます。そして「岩崩れ」に遭遇します。

「小宮は岩崩れがおさまると、また、前のような確実な歩調で歩き始めた。しかし裂けた傷口からは噴水のように血が出て止まらなかった。」死の予感を、小宮自身感じながら、ついに、全ての石を山頂に運び終えます。「小宮は白馬山頂に最後の石をおろした。待っていた新聞社や公園協会や地元民や登山者があらゆる讃辞を彼に投げて、小宮は絶望の表情で背負子から肩を抜かずに、眼を閉じていた。土色に皮ばった顔は勝利の色ではなかった。」

小宮の死を予見して小説は終わります。この物語にはモデルがいて、白馬山頂には今でもこの風景指示盤が現存するそうです。小宮のとてつもない努力が何のためだったのか?

よく生徒に努力の「理由」を聞かれることがあります。「何故、そんなにやらなきゃいけないのか?」ということです。「強力伝」の中に答えの幾分かがあるように思います。